【91】

氏　名（本　籍）	李（り）　嬪（れい）　妊（せい）（中国）
学位の種類	教育学博士
学位記番号	博乙第256号
学位授与年月日	昭和60年7月31日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
審査研究科	心理学研究科
学位論文題目	幼児の耐性の形成に及ぼす自己教示の影響に関する実験的研究
主　査	筑波大学教授　教育学博士　高野清純
	筑波大学教授　教育学博士　杉原一昭
	筑波大学教授　教育学博士　加藤隆勝
	筑波大学教授　遠藤昭彦
	筑波大学助教授　井田範美
	筑波大学助教授　教育学博士　市村操一

論　文　の　要　旨

(1)　研究の目的

幼児の耐性に関する心理学的研究は，幼児教育上重要であるにもかかわらず，これまであまりなされていない。本研究は自己教示との関連において，幼児の耐性の形成を検討するために，以下のような実験的研究が実施された。その際，耐性は目的をもつ行動の持続性の意味で，また，自己教示は自己決定された目的の達成まで，自己を組織的に運用できるよう自らを教示することと定義された。

(2)　都会幼児の報酬遅延の耐性に及ぼす自己教示の影響

従来の研究の検討に基づき，報酬遅延の間被験児に時計を提示すると同時に，主体的耐性を強化する試みとして，自己教示による自信や自尊心の強化が試みられた。そのことによって，注意を報酬に向けたまま，待つことの困難さを克服させることができるかどうかを検討することを目的とした。

被験児は5～6歳児40名(男女同数)。統制群は大，小の報酬を見て15分待つ。自己教示群は統制群の条件に言語による自己の意志表示が付加された。時計群は統制群の条件の外，時計の針によって実験者の帰って来る時間を知らされた。報酬不在群は報酬を見ないで15分待つ。いずれ

の条件下でも，被験児は待つのに耐えられなくなった時，ベルを押して，実験者を呼び戻すことができた。実験はすべて個別に行われた。測度は実験者が実験室を離れた瞬間から被験児がベルを押すか，報酬を食べるまでの待ち時間の長さであった。

その結果，耐性は統制群＜報酬不在群＜自己教示群＜時計群の順に大きいことが見出された。統計的には，統制群が他の3群に比較して有意に短い耐性を示した。

この結果から，時計と自己教示を加えることによって，耐性が著しく強化されることが示唆された。それは幼児でも自己教示は耐性の形成を助長すること，期待や耐性の過程についての具体的認識は耐性を強化することを意味しているといえよう。

(3) 僻地幼児の報酬遅延の耐性に及ぼす自己教示の影響

前述の実験で見出された結果が，僻地の幼児についても認められるかどうかを探究することが，目的とされた。

被験児は4～6歳児各24名（男女同様）。実験条件は前述のとおりである。

耐性の大きさは，統制群＜自己教示群＜報酬不在群＜時計群の順となり，統計的には，統制群の耐性が他の3群より有意に小さいことが明らかにされた。この結果，前の実験によって示唆されたことがらが確認されたといえよう。

(4) 幼児の誘惑への耐性に及ぼす自己教示の影響

本実験の目的は，幼児の誘惑に対する耐性に影響する条件を，自己教示との関連において研究することであった。特に，次のような4種の態度を形成する自己教示が取り上げられた。即ち，①禁止されているために盲従する（統制群），②禁止への違反は，自己に災いが及ぶので自制する（自己被害群），③禁止への違反は他人に迷惑をかけるから自制する（他人被害群），④禁止への違反は，自尊心や信念に反するから自制する（自己教示群）である。

被験児は4～6歳児各24名（男女同数）。まず予備実験によって，幼児に好まれる玩具，好まれない玩具それぞれ4種が選ばれた。統制群は机上に上述の玩具とベルの置かれている室で，実験者が用事をすませて戻ってくるまで待つようにいわれる。また，玩具にふれてはいけないと教示される。自己教示群の実験条件は基本的には統制群と同じであるが，被験児自身のことばでの自己教示の録音を聞きながら待つ条件が付加された。自己被害群の被験児は拡大鏡でカビの実物を観察した後，次のような場面からなる紙芝居が見せられた。①カビとパン，②貨幣とバイ菌の拡大図，③机上に人気のある玩具があって，女性が男の子に玩具にさわるのを禁止している，④男の子が禁じられた玩具で遊んでいる，⑤男の子が顔をしかめて腹を押さえている，⑥男の子が病気で寝ており，人気のある玩具が枕もとに散らばっている。他人被害群では自己被害群の最初の4枚に加えて，赤ん坊が泣いていて，枕もとに人気のある玩具が散らかっている絵が用いられた。測度は，①被験児が玩具の誘惑に負けてさわるまでの時間と，②被験児が最初にさわった玩具であった。

その結果，耐性の大きさは統制群＜他人被害群＜自己教示群＜自己被害群の順となった。このことから，幼児でも自己教示によって，かなりの自律的耐性を持ち得ることが明らかにされたと

いえる。また，耐性に及ぼす自己教示の影響は，年長児ほど大きかった。さらに，紙芝居をみた被験児は，人気のある玩具にも触れることが少く，その効果は明白であった。

(5) 幼児の課題解決の耐性に及ぼす先行経験の影響

幼児の耐性に及ぼす影響をさらに明らかにするとともに，自己教示の効果を検討しようとする。この目的を満たすために，2つの実験が行われた。

実験1：同課題における先行経験の課題解決が耐性に及ぼす影響を明らかにするために計画された。

被験児は4～6歳児各24名（男女同数）。実験材料としては，先行経験用として，直径2㎜のゴム紐を4cm1区間として結び目をつくったものが用いられた。失敗条件では，4cm区間が3.7cmになるよう固く結ばれ，接着剤がぬられた。成功条件では，4cm区間が3.3cmになるようゆるく結ばれた。成功―失敗条件では，失敗，成功各条件での結び目が，それぞれ2つずつつくられた。耐性テスト用としては，4cm区間が3.6cmになるまで結ばれた解きにくい結び目5個のあるゴム紐が用いられた。測度は，①被験児の解いた結び目の数と，②結び目解きに費やした時間である。

その結果，耐性は失敗群＜統制群＜成功―失敗群＜成功群の順になった。

実験2：失敗群の課題解決の耐性に及ぼす自己教示の影響を検討することを目的として実施された。また，先行失敗経験に異課題を用いて，同課題の場合との差を明らかにしようとした。

被験児は4～6歳児各48名（男女同数）。先行経験用同課題は実験1と同じであったが，異課題としてはプラスチックの知慧の球が用いられた。耐性テスト用課題は実験1と同じである。実験条件は実験1と基本的な部分は同じであるが，同課題失敗群に自己教示が用意された。測度は被験児の解いた結び目の数であった。

その結果，耐性の大きさは同課題失敗条件＜異課題失敗条件であり，自己教示の用いられた群は用いられなかった群より大きな耐性を示すことが見出された。

(6) 事例研究

以上の実験的研究の結果に基づいて，耐性の欠除が原因と考えられる幼児の行動上の問題の改善が試みられた。本研究で見出された自己教示の手続きが，3例の幼児に施行され，期待どおりの結果を得ることができた。

審　査　の　要　旨

これまで幼児の耐性と自己統制の問題は，主として次の理由から幼児心理学においては，研究対象の外におかれがちであった。即ち，①意志概念に属するとされ，近代的な心理学で扱われるよりも，哲学や教育のテーマである。②幼児の言語における行動の調整機能が未発達である。本研究は自発的な意図や主体的決断に基づく耐性をもった幼児の性格教育をめざす観点から，この問題をとりあげ，自己統制訓練によって幼児の耐性を形成できる可能性を示唆した有意義な研究と評価でき

る。厳密な実験的研究に基づいて，幼児の耐性形成の技法を確立し，具体的な事例に適用し，成果を確認している。

この研究に対して，実験条件の記述が不適切であるとか，この実験で用いられた条件が幼児の自発性を育てるのに適しているかなどの問題点も指摘できなくはない。しかし，外国人という言語上のハンディキャップや実験的手法を利用するのに困難な領域での研究であることが考慮されなければならないであろう。

よって，著者は教育学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。